2025.11.30

# 『西海考古』第 15 号の概要

〇金恩瑩（キムウニョン）（訳：水ノ江和同）「新石器時代韓日交流の動態」

【概要】

金恩瑩氏の論文は、韓半島南部と九州北部における新石器時代の交流を、黒曜石の産地分析と漁撈具の編年を軸に再検討したものです。従来の『共同漁撈文化圏』説を批判的に捉え、隆起文土器段階と栗里式土器段階における黒曜石搬入の様相を精査し、交流の強度と方向性が時期ごとに変化したことを提示しています。特に、黒曜石製組合式銛頭の出現を、九州縄文後期との併行関係に位置づけた点は、従来の一方向的影響論に対する重要な修正を提起しています。

金氏は「共同漁撈文化圏」の存在を一律に否定するのではなく、時期によって交流の形態が異なることを強調し、後期に限定的ながら文化圏的な共有が成立した可能性を示唆しています。

〇中尾篤志「金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を読んで 」

【概要】

中尾篤志氏のコメントは、金氏の論文を日本の研究潮流の中で位置づけ直す試みです。特に、結合式釣針や組合式銛頭の編年を通じて、韓日間の交流を単なる遺物の類似性ではなく、技術体系の相互作用として捉える視点を提示しています。中尾氏は、交流の実態を『共同文化圏』として一括りにするのではなく、時期ごとの変容を重視する立場を明確にし、今後の比較研究の課題を示唆しています。

中尾氏は「共同漁撈文化圏」説に懐疑的であり、むしろ黒曜石や漁具の分布に見られる地域的差異を重視し、韓日間の交流は文化圏的統合ではなく多様な接触の積み重ねであったと考えています。

〇水ノ江和同「金恩瑩「新石器時代韓日交流の動態」を翻訳して（訳者後記）」

【概要】

翻訳者の水ノ江和同氏は、韓日交流研究の長い系譜を踏まえ、金氏の議論を日本側の研究史に接続しています。曽畑式土器の内在的出現論や結合式釣針の地域的差異をめぐる日本側の再検討を参照しつつ、韓国研究者の分析を日本の議論に対置することで、両地域の研究動向の相互補完性を強調しています。翻訳そのものが、学術交流の一環として機能していることを示す好例といえます。

水ノ江氏は、従来の「共同漁撈文化圏」説に対して批判的であり、特に曽畑式土器や結合式釣針の分析から、韓日間の交流は一様な文化圏形成ではなく、時期ごとに異なる関係性を持つとする立場を取っています。

【金、水ノ江、中尾論攷の総括】
　三者の論考を通じて浮かび上がるのは、韓日新石器時代交流研究が、単なる遺物の比較から、産地分析・編年・技術体系の検討へと深化しているという点です。黒曜石搬入の時期的変動、漁撈具の系統的差異、土器編年の併行関係など、方法論的に精緻化された議論が、従来の『共同漁撈文化圏』説を再構築しつつあります。金氏は限定的な文化圏形成を認める可能性を示し、水ノ江氏は批判的に再検討を進め、中尾氏は懐疑的な立場から多様な交流像を提示しています。今後は、交流の方向性や強度を時期別に捉える視点を共有し、韓日双方の研究成果を突き合わせることで、より立体的な交流史像を描くことが求められるでしょう。」

〇大坪芳典「考古学的調査に基づく佐賀城跡の時期的変遷と土木技術 」
　【概要】
　本論文は、1980 年代以降に進展した佐賀城跡の発掘調査を基盤とし、近世のみならず中世・古代にまで遡る考古学的知見を提示しています。特に、堀や水路の構造、板搦から石搦への護岸技術の変遷、さらには暗渠水路の存在など、城郭整備における高度な土木技術が明らかにされました。
　この研究は、龍造寺氏から鍋島氏へと権力が移行する過程を、堆積層や遺構の検出を通じて実証的に示すものであり、文献史学と発掘成果を架橋する重要な試みです。佐賀城跡を「0 期～Ⅲ期」に区分し、古代から幕末に至るまでの城郭の変遷を層位学的に整理した点は、地域考古学に新たな視座を与えるものといえるでしょう。

〇井手基子・山本紗希「近世佐賀城における上水道経路の検証」
　　ー多布施川から佐賀城本丸に至る経路についてー
　【概要】
　本研究は、近世佐賀城の上水道整備に焦点を当て、多布施川を起点とする水路がどのように城下町や本丸・二ノ丸へ導入されたのかを、最新の発掘成果と文献史料をもとに再検討したものです。特に、石井樋から城内に至る水路の立体交差構造や暗渠遺構の存在を明らかにし、従来不明であった本丸・二ノ丸への配水経路に新たな考察を加えています。
　この論文は、佐賀城の普請・焼失・再建という歴史的変化に伴う水利システムの変遷を具体的に示し、近世城郭研究における水利・土木技術の理解を大きく前進させるものです。

〇野村俊之・加藤久雄「大村藩領彼杵における禁教後 ー定型化以前の妙法銘墓石についてー」
　【概要】
　本論文は、潜伏キリシタン墓地調査の成果を踏まえ、近世前期における墓石形態の変容を詳細に検討したものです。特に寛永期に造立された「妙法」

銘を持つ花灯形墓石の存在は、従来の定型化墓石出現時期に新たな視点を与え、禁教政策下での宗教的表象のあり方を考える上で重要な資料となります。本研究は、近世墓制の多様性と地域的特性を再考する契機を提供するものです。

〇藤木 聡【資料紹介】「佐世保市前原遺跡・南島原市出口遺跡出土の火打石 □
ならびに小倉大道銘火打金（民具）の報告」

【概要】

本論文は、近世から中世にかけての火起こし具に関する考古資料を精査し、長崎県域における火打石・火打金の出土事例を新たに提示するものです。特に、佐世保市前原遺跡からの円磨珪岩製火打石、平戸市出口遺跡からの中世期の可能性が高いチャート・石英製火打石、さらに島原城展示の「小倉大道」銘火打金の報告は、従来限られていた肥前地域の資料を補完し、火打石の石材選択や流通、地域的特性を考える上で重要な知見を提供しています。

本研究は、火起こし技術と物質文化の歴史的展開を解明する基礎資料であると同時に、近世都市や地域社会における物流・経済の実態を考古学的に読み解く可能性を示すものです。考古学研究者にとって、火打石・火打金を通じた「人と火の歴史」の再構築に大きな示唆を与える報告といえるでしょう。

〇古澤義久【書評】「廣瀬雄一著『対馬海峡をめぐる先史考古学』を読んで 」

【概要】

廣瀬雄一氏の『対馬海峡をめぐる先史考古学』（2023 年）は、40 年以上の研究を集大成した大著であり、縄文時代の日韓交流を「土器・石器・装身具」という三層のネットワーク論から再構築したものです。

古澤義久氏の書評は、この著作を「交流研究新時代の幕開け」と位置づけ、従来の土器偏重論を超えた方法論的革新を高く評価しています。

また、2000 年代以降の「交流はごくわずか」とする水ノ江説に対し、廣瀬氏の研究がその行き過ぎにブレーキをかけ、交流の多様性と融合を積極的に認めた点を強調しています。

さらに、交流の質を理解する鍵として「仲介者」の存在を指摘し、限定的ながら重要な役割を果たしたことを論じています。

（文責　古門）

※なお、上記の【概要】は、いずれも生成 AI を用いて作成しています。